166

幼稚園教育における指導計画の一考察II
——幼児の生活環境の構成——

髙杉自子
（子どもと保育総合研究所・青山）
○岸井慶子
（千葉明徳短期大学）
篠原直子
（台東区立根岸幼稚園）

1. はじめに

第48回保育学会（平成7年度）において、幼児が
園生活の中で環境にどのようにかかわっているかにつ
いて、具体的実践例の考察を重ね、その結果を発表し
た。その中で保育環境としての要件を捉え、幼児の発
展を支える環境とは何かを考察した。それに引き続き
環境の質に着目し、幼児が発達に必要な環境の要件を
導き出すことを目標として事例研究を重ねる。特に、
指導計画作成上、環境の構成とは何かを追求したい。

2. 方法

昨年に引き続き、同クラスについて1か月に1回保
育をVTRにより、保育カンファレンスを行い、幼児
の生活と環境、環境の意味、教師の援助等について考
察する。

3年保育4歳児のUクラスを引き続き観察対象とし
たが、担任が替わり、新しく2年保育12名が加わり
計24名となる。そのため教師と子ども、子ども同士
の関係がつくるまで1学期かかった。

3. 事例（10月16日（月）AM 9:00 ～11:00）
（3年保育4歳児U男、S吾、U丸、S太、
S介、M樹らの巧技台遊び）

（活動のおおまかな流れ）
・登園後、S吾が空で巧技台の箱とビームを組み始
めた。すぐにU男が「すがうだろ」とビームの組み方
を教えるかたちで参加した。その後、U丸、S太、M
樹、S介、等が参加し昼食まで遊んだ。

（VTR記録からわかったこと）
A: 環境の本的な「質」、B: 子どもにとっての意味
の生成、C: 教師の援助の三点から分析、考察した。

A: 環境の本的な「質」について
(1) 巧技台は子どもたちに常に関しられ使われている。
大きく、重く、固定的な場をしめるため、
①最初に遊びを始めたS吾の存在（オリエン）が明
確である。
②真似で作ったり、借りて交換して遊んだりするよ
りも「仲間にいる」という形で一緒に遊ぶ。
③先の幼児に見えてやるため、遠くにいる幼児や
近くを走り抜けた幼児なども参加している。
(2) 巧技台その自身がイメージを限定しないため、
①参加している意識はもちろら、それぞれが多様
なイメージをもったり、途中であらたなイメージ
に変化することが出来ている。
②途中でその場からいなくな再来するなど、拠点
・基地的な場となっている。

B: 子どもにとっての意味の生成
(1) 個々の幼児がそれぞれの状況においてかかわるため
同じ環境でも、それぞれにとっての意味が異なる。
また、意味は変化している。
①U男は始め、スタートとゴールを決めゲームのよ
うな遊びをしようとした。しかしU丸らの行動を
受けネコ・ワニ・人の遊びをした。つまり、U
男にとって、過去の経験を生かす場→遊び方を主
張する場→他の遊び方を受け入れ、自分の遊びを変
更する場へと意味は変化している。
(2) U丸は仲間入りの始め、「どこからやるんだ等
と遊び方を尋ねるが、すぐに「ごっこ」的な遊び
へと他を誘い入れる。日頃活発そうなU丸だが実
は高い所のビームは苦手で、それに低い所で
楽しめる遊びへと誘ったように推察された。これ
より、U丸にとっては、自分の弱点をカバーしながら
仲間の中に自分を位置づける場になっている。
(3) 少し後から参加したM樹は、U丸のネコごっこの
説明を聞かず、自分の好きな形の「戦い」のイ
ージを持ち込み、なりきって遊ぶ。その後、魚釣
ごっこへと遊びが変化すると、製作が苦手なM樹
はなんとかして釣り竿を借りて遊ぼうとする。
つまり、得意なことが思い切りやる場→自分の
弱点をカバーしながら（変えられながら）遊ぶ場
へと変化している。
(2) 子どもが自ら気づき、遊び取り、遊びの中に位置づ
けることで初めて「意味をもつ」ことがある。例えば
①巧技台遊びのすき間にあったフープ（スズランテ
ープがたくさん付いている）をS吾とS介が持っ
て「湖」と命名する。そのことで今度は巧技台の場が魚釣りの場へと変わる要因の一つとなっている。
つまり、最初からそこで魚釣りをする予定でも、フープを湖に見立てていた訳でもない。（フープは運動会の競技で腰を低くして使用）幼児自らが選びとって意味付けたのである。
②偶然に当たりかかった教師たちはまたま持っていた魚付き牛乳パックを、M樹が見つけ、走って行ってらしく、振り返ることから「魚釣り」が始まった。
片付けようとした幼児が、M樹の行動を通じて意味をもつことになった。
③魚釣りが始まり、釣り上げる物が欲しくなった時、Z男は壁面に貼っているイカが欲しくなる→グループには入っていないが自分も魚釣りのつもりでいたW男は先に壁からはがして自分のものとする→Z男はW男と取り合い、結局自分の気持ちを抑える。
イカが単に「魚釣りに必要な物」ではなく、「自分を主張したり我慢したりさせる物」という意味もつようになっている。

C．教師の援助
(1)教師が洞察し、判断して、環境に意味を込めていく
〇M樹が魚釣りの真似をした時、教師がすぐにそのイメージを受け止め、言葉に出し、魚があると楽しくなることを知らせ、近くにあった魚（運動会の競技で3歳児が使った空気箱）をまるで生きた魚を探るようにに「湖」に投げ入れている。このような教師の判断、具体的対応によって、魚釣りのイメージが多の幼児に伝わり、その場にいた幼児たちにとって意味あるものとなっていた。
(2)8日前の運動会のテーマは「海」。運動会で使った物を空箱の隅に置いていた。これらは「子ども自身が何かする時に・・・」という「意味」が込められ、具体的な活動を意図して用意されたのではない。

4．考察とまとめ
昨年度（第48回）の発表で、3歳児の幼児はきわめて広範囲から複雑で多様性に富む環境を受け入れ、味わいながらながら側から働きかけ、自ら進んで次々と遊びを生み出し展開していくことに気づいた。その幼児たちを観察し、本年度は4歳児に成長したZ男を中心とした幼児たちの具体的活動事例から、環境に視点をあてて考察し、次のことにも気づいた。
①活動と環境の関係について
自己で遊びたいことを探し、環境の中からその対象を選びかざわっていく。そこへ声がきいて選び足したり修正したりしながら皆で場を構成し遊びを始める。仲間入りをする幼児にとって流れはどんな変化していくか、更に偶然性をも引き込むまま環境を変え、あるいは環境が変わる。環境が変わる遊びも変わるといつにお互いにからまり合いながら遊びが進んでいく。もちろん教師の働きかけは示出した事例なども取り入れる。単独で一方的ではない。
・幼児の選ばいは環境を構成して遊びが生まれ、遊びが広がる環境に変えて遊びを進める。
・環境は固定されたものでなく流動的な動態である。
・幼児の行動模様、行動の目的をもつことにより行動が開始し、環境が変わることで学校の環境の変化を示す動機や目的が明確になる相互作用で進む。
・幼児は環境にかかわりながら本来の性質を知ろうと様々なかかわり方をする。その性質を知ると、その質を生かしたり利用したりして遊ぶ。
②環境の意味の生成について
・子どもにとって環境に意味が生成されると、環境は遊びの中に位置付く。
・その意味が他の子どもにも伝えられると、遊びの生成は複雑化したり多様化したりしながら広がる場合と意味が明確化され遊びが持続発展する場合がある。
・遊びの意味の生成は伝播の中で、子ども同士はお互いに相手の行動の意味を読み取り、理解し合う関係を深める。反対の場合もある。
・子どもが生成した意味を教師に受入れたり、意味をこめてすることによってその意味は実現化に向けて作用し遊びが進んだり発展したりしていく。
③環境の構成と教師の援助
・以上①、②は少なくとも環境構成時に押さえなければであり、以上のよう状況をつくる。あるいは多様性、多声性を受け入れる容器（フィールド）をつくることが環境の構成ではないかと考えられる。
・いずれにしても、幼児が自由感をもち自然体で行動できる環境である。相手に対して温かい関心をもつ関係が育つような環境の構成が基本的に必要である。
・教師が思考性と見えがることが、子どもにとっては必要なかもしれない。子どもも教師に共に生活を創るために「生活のはある環境」、子どもと教師の「思い入れのある環境」、にしていきたいと願っている。

—337—